

## P-7-76

### 「認知症サポーター養成講座」「健康生活支援講習」を福島市と共同で開催して

福島赤十字病院 看護部<sup>1)</sup>、日本赤十字社福島県支部<sup>2)</sup>

○野地 啓子<sup>1)</sup>、武田 玲子<sup>2)</sup>、岩崎 陸子<sup>2)</sup>

「認知症サポーターキャラバン」事業は、認知症を正しく理解し、認知症の人や家族を地域の中で支え温かく見守る応援者を増やし、それぞれの地域が認知症になっても安心して暮らせるまちを目的に、厚生労働省が平成17年から展開しているキャンペーンです。講座修了者にはオレンジリングが授与され、携帯を呼びかけています。現在福島県は、東日本大震災と原発事故で世帯分離など高齢者世帯が増加し、高齢化と少子化が一層加速されています。そこで、内容も健康生活支援講習と共通点が多い「認知症サポーター養成講座」を開催できないかと日赤福島県支部担当者が関係各所と交渉し、福島県と日赤本社、福島県支部が復興支援事業の協定を結んだことも大きな力となり、さらに当院が認知症疾患センターであることが後押しとなり承を得ました。その後「認知症サポーター養成講座」を開催する講師役となるキャラバンメイトの養成研修に赤十字健康生活支援講習指導員16名が参加し資格を取得し、福島県内で同講座を開催できることとなりました。そんな中福島市から問い合わせがあり、職員だけの対応が難しくなってきたとのことで、平成28年12月福島市と支部、病院3者で話し合いをもち、平成29年度から当院で毎月同講座や健康生活支援講習会を福島市と共催で実施することになりました。市には広報を担当していただき、毎回30名定員いっぱいを受講生が参加しています。職場や企業がこの講座に参加されている様子も散見され、この取り組みが地域に根差した赤十字活動の一例として参考にしていただければと思います。

## P-8-1

### EP療法が奏功した前立腺大細胞型神経内分泌癌の1例

石巻赤十字病院 泌尿器科<sup>1)</sup>、石巻赤十字病院 病理検査科<sup>2)</sup>

○高橋 拓大<sup>1)</sup>、藤井 紳司<sup>1)</sup>、板倉 裕子<sup>2)</sup>、石井 智彦<sup>1)</sup>

【症例】68歳、男性。健康診断にてPSA 18.36ng/mlと高値を指摘。近医泌尿器科を受診しPSA再検、PSA 24.52ng/mlあり。精査加療目的に当科紹介初診。直腸診で右葉に硬結を触知。PSA 30.76ng/mlにて経直腸的前立腺生検施行。Pro GRP 48.0pg/ml、NSE 13.2ng/mlと神経内分泌腫瘍マーカーは正常範囲。各種画像検査を行い、精養浸潤あり、多発リンパ節転移、多発骨転移あり。前立腺大細胞型神経内分泌癌、cT3bN1M1bの診断。CAB療法(combined androgen blockade)とEP療法(etoposide, cisplatin)併用の方針となった。EP療法2コース施行後の時点でPSA 0.781ng/mlと低下し画像上でリンパ節転移・骨転移ともに縮小した。EP療法は6コース施行終了。現在はCAB療法を継続中で画像上リンパ節転移縮小維持、骨転移は増悪なし、PSA 0.055ng/mlと低下中である。【考察】前立腺神経内分泌癌は前立腺癌全体の1-2%と稀である。純粋な神経内分泌癌が33%、腺癌と神経内分泌癌の混在が67%との報告がある。本邦での前立腺神経内分泌癌の化学療法はEP療法もしくはIP療法(irrinotecan, cisplatin)を施行している報告が多い。今回、我々は前立腺大細胞型神経内分泌癌に対してEP療法を施行した1例を経験したので報告する。

## P-8-3

### 基底細胞癌切除後の鼻唇溝皮弁による外鼻の再建

旭川赤十字病院 初期研修医<sup>1)</sup>、旭川赤十字病院 形成外科<sup>2)</sup>

○山田 真司<sup>1)</sup>、堀越 久子<sup>2)</sup>、田中あかね<sup>2)</sup>、丹代 功<sup>2)</sup>

【はじめに】顔面皮膚腫瘍切除による小規模の皮膚・軟部組織欠損の再建において、局所皮弁がしばしば選択される。その際、単に欠損部を被覆するのではなく、質感や色調が欠損部周囲の皮膚に適合するように、皮弁の種類や採取部を選択する必要がある。今回、我々は外鼻の基底細胞癌切除後の再建に鼻唇溝皮弁を用いる術を施行した。

【症例】81歳女性、約10年前から右鼻背部に腫瘤を認め徐々に増大したため前医受診した。生検で基底細胞癌の診断となり、切除目的に当科受診した。当科初診時に右鼻背に13×13mm大の黒色隆起性で出血性病変を認めた。全身麻酔下で腫瘤を3mmマージンで切除し、V-Y flapと回転皮弁を利用した鼻唇溝皮弁法にて欠損部を被覆した。

【結果】術後約5か月になるが、鼻翼のゆがみ・引きつれもなく、外鼻の形態は良好であった。腫瘍の再発も認めていない。

【考察】皮弁欠損の顔面再建において数ある局所皮弁の中でも鼻唇溝皮弁(Nasolabial flap)は特に外鼻の皮膚部再建に有効な皮弁の一つとされる。その適応・応用例は多岐にわたり、自由度の高さから外鼻のみならず眼瞼周囲、上下口唇、口腔内など他の顔面部位の再建にも使用される。多くの皮弁移動法や欠損形態に応じた皮弁デザインが考案されているが、部位や血管解剖を考慮し術式を選択していくべきである。本症例においてはV-Y advancement flap(V-Y flap)法だけでは皮弁の移動距離が短く、厚みが増してしまうことがあるため、鼻背の形態に沿った回転皮弁を用い、さらに下眼瞼の余剰皮膚を利用することで移動距離を最小限にしつつ鼻背の薄い皮膚を再現した。顔面皮膚欠損に用いる皮弁につき良好な結果が得られたので、若干の文献的考察を加えて報告する。

## P-7-77

### BSCを活用した赤十字普及事業への取り組み

石巻赤十字病院 医療社会事業課

○高橋 洋子

【はじめに】医療社会事業課では、毎年、赤十字普及事業におけるBSCを作成し、「赤十字活動を通して地域貢献をし、赤十字病院の存在価値を高める」を目標に活動をしている。【活動の実際】平成26年から設置された医療社会事業課は、赤十字普及を促進するため、毎年外部・内部環境要因を加味したSWOT分析を行い、BSCを作成し、目標を設定している。現在の目標は、2017年からの継続目標で、マップ・スコアカードが毎年の課題にむけ変化する。事業の課題は多々あるが、以下について報告する。【石巻以外の地域での普及事業推進】支部との連携により、気仙沼市・大崎市・女川町・南三陸町・東松島市の講習へと拡大している。講習開催時には、地域のニーズや要望に合わせて講習プログラムを実施し、赤十字病院の役割についてもPRを行っている。【病院職員への赤十字普及】職員増加に伴い、赤十字の理解者が減少している。「赤十字普及は、まず、足元から」とし、職員が赤十字を身近に感じられるように赤十字講習活用術を各部署に提案し開催した。院内講習の年間開催数は、平成27年9回から平成30年18回に増加し、さらに今年度は健診課の事業が追加された。また、病院事業加算要件の職員研修として、認知症ケア加算や看護助手加算にも活用されている。【後継者の育成】活動の結果、健康生活支援講習指導員5名・救急指指導員1名誕生した。【まとめ】医療社会事業課BSCにより、赤十字普及が明確化され、成果が見えてきた。そして、石巻地区の「次世代型地域包括支援システムでの赤十字講習の取り組みが、本社 地域包括ケア推進室の「地域包括ケア推進事業 宮城モデル」として、取り上げられた。支部と連携強化した取り組みが地域とのつながりを生み、赤十字講習依頼数の増加と指導員の育成につながった。

## P-8-2

### 当院で生じた碎石位手術におけるWLCSの発生要因

名古屋第一赤十字病院 看護部

○二宮 結花

【目的】当院では、2018年5月から10月までに、全身麻酔下の泌尿器科手術で手術部位が碎石位の患者51名の内、術後下肢コンパートメント症候群(以下WLCS)を発症した患者が2名あった。本研究では、WLCSの発生要因を明らかにし、WLCSに対する予防対策に繋げたいと考える。【方法】研究デザインは、後ろ向き症例対象研究と事例研究である。調査項目30項目をWLCS発生群(患者2名)とWLCS非発生群(患者4名)でx<sup>2</sup>検定、t検定で分析した。また、WLCSを発生した2例に対して事例研究を行い、患者背景と手術内容から発生要因を考察した。【結果】調査項目の手術時間のみ有意差を認めた。WLCS非発生群の平均手術時間は6時間20分±90分であった。WLCS発生患者1事例目は、膀胱全摘回腸導管造設術を受けた患者であり、手術時間が11時間36分で、碎石位の股関節屈曲は約20度であった。また、術中出血量4230g、拡張期血圧50mmHg以下が10時間以上、体温36度以下が5時間30分持続していた。次にWLCS発生患者2事例目は、ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術を受けた患者で、手術時間は6時間11分であり、碎石位の股関節屈曲は0度で、頭位時間は5時間27分であった。また、術中出血量150gで、拡張期血圧50mmHg以上、体温36.5度前後で推移していた。WLCS発生群に共通した要因には、長時間手術に加えて骨盤内手術操作、術中下肢の除圧を実施していなかったことが挙げられる。WLCS非発生群の内、膀胱全摘回腸導管造設術を受け、手術時間が11時間43分であった患者がいたが、WLCS発生患者との違いは喫煙歴や糖尿病の既往がないことであった。【考察】当院のWLCS発生には長時間手術が大きく関与していたと考えられる。看護師は、碎石位手術でWLCSが生じる可能性があることを認識し、患者背景と手術内容を含めたアセスメントの実施に加え、碎石位の下肢固定や術中下肢の除圧と観察に積極的に関わる必要がある。

## P-8-4

### 当院皮膚科で過去3年間に経験した梅毒症例の検討

旭川赤十字病院 皮膚科

○荒塚 達也、菅原 基史、木ノ内基史

近年、全国的に梅毒感染者届出数が増加している傾向にあり、当院が位置する旭川市でも平成27年から患者数が急増している。今回、我々は当院皮膚科で過去3年間に経験した梅毒6症例について検討を行った。6症例の平均年齢は38.0歳、男女比2:1、異性間の感染が5例、同性間が1例、平均治療期間25.7日であった。受診契機は入院時のスクリーニング検査で陽性となり偶発的に発見された症例が3例と多く、6例中2例では症状が顕性化し本人の意思で受診していた。皮疹などの症状を有した患者は4例であり、皮疹の内訳は重複を含めて丘疹性梅毒疹3例、扁平コンジローマ2例、バラ疹1例、鼠径部リンパ節腫脹を1例で認めた。また、自験例中2例でTPHA高値であるもRPR法陰性の症例を認めた。原因として抗体が過剰のとき、特異抗原と抗体の混合物の中で観察可能な反応が起こらなくなる現象であるプロゾーン現象の可能性を考え、検体を4~20倍に希釈したところRPR法は陽性となり、プロゾーン現象によるRPR法の偽陰性と判明した。梅毒は日常診療において遭遇する機会があることから、臨床徴候の知識とともに血清反応の理解も重要と考える。